歳時世相篇

⑦

【ハリ・ラヤ】

オラン・アスリの祝祭日

信田 敏宏（のぶた としひろ）
本館研究戦略センター

わたしが調査を続けているマレーシアの先住民オラン・アスリの村では、毎年、一〇月の初旬に、「ハリ・ラヤ」とよばれる行事がおこなわれる。ハリはマレー語で「日」、ラヤには「大きな」「祝う」などの意味がある。

スラマット・ハリ・ラヤ！

ハリ・ラヤの一日を簡単に描写してみよう。ハリ・ラヤ当日、村びとは日々の仕事を休んで、朝から、牛肉や鶏肉のカレーと、ルマンとよばれる「ちまき」（竹の筒のなかにもち米、ココナッツミルク、少量の塩を入れて炊いたもの）を作る。料理の準備が一通り終わると、前日に掃除をしてきれいに片づけた客間（その日だけ客間になる部屋）に、カレーなどの料理やルマン、お菓子、そしてジュースなどの飲み物を並べて、客人が来るのを待つ。

当初のハリ・ラヤでは、会館に村びとがつどい、共食していたが、今では家々で食事を準備するようになった。子どもから老人まで、村びとは着飾って近しい親族の家を訪問し、おいしい料理をご馳走になり、その家の人たちや訪問客とおしゃべりをしてひとときを過ごす。訪問する際には「スラマット・ハリ・ラヤ！（ハリ・ラヤ、おめでとう！）」と主人に言って握手を交わし、「さあ、どうぞ、食べてください」という主人のことばを合図に、料理を食べる。その後は、手作りクッキーなどを食べ、ジュースや甘いミルクティー、コーヒーを飲む。そうして、二、三軒ほどの家を訪問すると、普通はお腹がいっぱいになるが、子どもたちや若者たちは、いくらでも食べられるので、喜んで何軒もの家々を訪問する。こうして、午前中から何となく始まるハリ・ラヤは、相互訪問を繰り返しながら、夕方まで続く。

日が暮れると、村の若者たちが演奏する生バンドに合わせて野外ディスコが開かれる。大音量のロック調のリズムに合わせて、子どもたちや若者たち、そして酔っ払った男たちが夜通し踊り続けるのだ。そのなかには、オラン・アスリだけでなく、マレー人や華人の姿も見える。ときには、酔った男たち同士でトラブルになり、警察沙汰になることもある。村外から訪れる若い客人たちの本当の目当ては、男女の出会いにある。ハリ・ラヤを舞台に恋が芽生えることもある。

文化を模倣する

マレーシアでハリ・ラヤと言えば、普通は、イスラームの断食月明けの大祭（ハリ・ラヤ・プアサ）を意味している。ハリ・ラヤ・プアサでは、首相官邸も一般に開放され、おおぜいの人びとがお祝いに訪れる。訪問者には、料理やお菓子、飲み物などが振舞われるが、イスラームの戒律に従ってアルコールは厳禁である。こうしたハリ・ラヤ・プアサの祝祭は、首相の家ばかりでなく、マレー農村の家々でも断食月明けにおこなわれる。イスラームはいわゆる太陰暦を採用しているので、毎年、ハリ・ラヤ・プアサは、太陽暦を基準にすると、一一日ほど早く来ることになる。

調査村のハリ・ラヤの一場面。子どもたちも着飾っている（2003年10月）

オラン・アスリは、このマレー人のハリ・ラヤ・プアサを模した祝祭をおこなっていることになるのだが、マレー人のハリ・ラヤとオラン・アスリのそれとでは意味が大きく異なる。オラン・アスリの場合には、そこに宗教的な意味は付されていない。わかりやすく言えば、クリスチャンではない日本人がクリスマスを楽しむような感じである。

オラン・アスリ社会でも、イスラームへ改宗したオラン・アスリの人びとは、マレー人のハリ・ラヤに合わせて、祝祭をおこなっている。一方、キリスト教へ改宗したオラン・アスリはクリスマスに、また、華人との付き合いが深いオラン・アスリは、華人の旧正月（春節）に、それぞれ合わせている。いわゆる正月（太陽暦）にハリ・ラヤをおこなう村もある。その結果、年末から年始、一月、二月にかけて、オラン・アスリの村では、あちこちで週末毎にハリ・ラヤがおこなわれることになる。いずれも、ハリ・ラヤの方法はほぼ同じであるが、オラン・アスリの場合には、ビールなどのアルコールも給されるのが特徴であろうか。

親族がつどう日

わたしの調査村では、以上のようなオラン・アスリ社会が他文化を模倣する状況を改善し、村の独自性を主張するために、十数年前から毎年一〇月一日にハリ・ラヤをおこなうことにした。他村の人にもわかりやすいように「ハリ・ラヤ」と村の人びとはよんでいるが、正式名称は「ハリ・クスダラン」である。ハリ・クスダランには「むかしの苦しかった日々を思い起こす日」という意味が込められている。この名称には、模倣ではない新しい伝統を創造しているのだという彼らの自負が見え隠れしている。最近では、休暇が取りやすいように、一〇月の第一週の週末にハリ・クスダランを実施している。そのときには、都市で働いている若者たちも、休暇を取って、バスなどを乗り継いで、村に帰ってくる。以前は、知人や職場の人たちには休暇の理由が理解されにくかったが、十数年も続いた今では伝統行事として定着してきているようだ。夜の野外ディスコには、あちこちの村からおおぜいの人びとがやってくる。この日ばかりは、ゆっくり眠ることはできないが、村びとはみな毎年この日が来るのを楽しみにしているのだ。

わたしもハリ・クスダランや他村でのハリ・ラヤを何度か経験した。最初は食べ過ぎたり、会話もぎこちなかったが、次第に慣れて、誘われるままに次々に多くの家々を訪れることができるようになった。夜の野外ディスコでは、「上を向いて歩こう」をアカペラで歌ったこともある。残念ながら、恋は芽生えなかったが。